

「日本資本主義」の倫理と行動様式

国際日本文化研究センター名誉教授 山折 哲雄

念頭によみがえる思い出がある。2001年に、米国経済の心臓部を襲った9.11テロ発生後まもなくの頃だった。笹川平和財団の会長をされていた田淵節也さん（野村証券元社長）と対談する機会があった。そのときの氏の発言がつよく印象に残った。半生のあいだ経済と株式の世界で生きてきたが、株の相場の変動には神の摂理がはたらいていると思わないわけにはいかないといわれたのである。

それを機に話の枝葉が広がり、その場合の神の摂理はアダム・スミスのいう「見えざる手」にほかならないが、日本経済の場合、「一神教」の見えざる神の手であるより、むしろ「八百万（やおよろず）教」の神々の見えざる手ではないかという話になった。

面白いテーマと思いつつ言葉をかわしていたが、よく考えると、八百万の神々の見えざる手、というのがわかったようで、よくわからない。多神教的な神々の「見えざる手」の感触とはいったいどんなものなのか。田淵さんとの話はその先の方へはなかなか進まなかった。が、やがてその八百万の神々の見えざる手をめぐり、私の胸の内に三人の日本人のイメージが点滅するようになった。渋沢栄一、出光佐三、松下幸之助の三人である。

渋沢栄一が、その生涯を通じてえた教訓は「論語」の精神にもとづく事業経営だった。かれは産業活動と徳育が緊密な関係にあるべきと強調し論語ソロバン説を唱えた。私は日本人の合理主義はアングロサクソン流と一味も二味も違う儒教合理主義だと思っているが、そうした考え方を近代日本に植えつけようとしたのも渋沢栄一だった。

つぎの出光佐三は、外国からの原油の大量買いつけに辣腕をふるい、業界の一匹狼ぶりを発揮したが、その経営哲学は「人間尊重」と「家族主義」にもとづくユニークなものだった。とりわけ江戸時代の禅僧、仙厓和尚に心酔し、その作品の収集家としても知られた。その仙厓の描いた作品に○△□をあしらった象徴画があるが、それが以前は全国各地の出光スタンドの片隅に掲げられていた。わが国近代における仏教資本主義の一例といっていいいだろう。

第三の人物が松下幸之助である。丁稚小僧から身をおこし松下電器産業という大企業をつくりあげ、「経営の神様」とうたわれた。その経営哲学を支えるものに二つの心構えがあった。一つは弱者の身になって考えること、第二が負けることを知って立身せよである。戦後、社会の平和と幸福を追求する運動をはじめた。その一環として、京都の一角に「真々庵」と称する庭園をつくり、片隅に「根源社」と名づけるカミの社をひっそり祀（まつ）った。かれはしばしばそこを訪れ、神前に座して瞑想（めいそう）にふけたという。

日本資本主義の発展につくした三人の人生と事業を顧みると、儒教、仏教、神道の伝統が影を落としていることがわかる。その流れが、中国文明を受け入れた和魂漢才、西欧文明を受容した和魂洋才という日本人の生き方そのものであったことを忘れてはならない。むしろこれら三人の背後には、近世の石田梅岩や二宮尊徳のような存在がひかえていた。梅岩の「心学」（経済倫理）や尊徳の「報徳仕法」（計画経済）の考え方が、陰に陽にかれら三人の生き方や企業精神に影響を与えていたであろうことが推測される。いってみればそれこそが、八百万教の神々たちによる見えざる手さばきだったのではないだろうか。

さて、その多神教の神々による手さばきについて、よくはわからないが、例えばこんなことが思いつく。日本列島のような風土では、西欧社会において鍛えられた契約の精神は十分に育たなかった。契約社会においては債権・債務が同等の比重で考えられているけれども、わが国の貸し借りの人間関係においては、「恩」や「感謝」を重視する慣行が続いていた。それは債権の要求をできるだけ抑制し、債務の感覚を最大限に強調しようとする心性を助長した。債務至上主義である。これこそ自然の恵みに首を垂れる多神教的風土における「見えざる手」の感触だったのではないか。

明治以降の企業家たちは、この「恩」という名の債務至上主義を温存させつつ、西欧直輸入の契約の精神との間で何とか折り合いをつけようとしてきたのではないだろうか。いってみればそれぞれの事業経営で「二重帳簿」的な会計処理を行ってきたのである。1

では、こうした日本人の経済思想や企業活動を日本の経済学はどう考えてきたのか。私も学生のころから、人並みにカール・マルクスかぶれ、マックス・ウェーバーかぶれの時代があった。『資本論』の一部を聞きかじり、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』をバイブルよろしくかつぎ回ったこともある。その理論を下敷きに書かれた日本の資本主義に関する論文などに目を通したこともあった。

ふり返って気づくのは、わが国における経済分析の手法の背後には、いつも一神教的な神の「見えざる手」がはたらいていたということだ。いずれの場合でも、八百万教の神々の「見えざる手」に言及する視点や思考はほとんどみられなかった。もっとも私なども宗教学の分野でまったく同じことをやってきたのであるから偉そうなことはいえない。マルクスかぶれの宗教学、ウェーバーかぶれの宗教学でことをすませてきた。その上、宗教予測もままならないところも、予測のきかない学問として経済学とは似た者同士であった。

こうして今や世間の関心の的になりつつあるのが、宗教学分野における宗教意識調査であり、経済学のエコノミストによる経済予測、ということになっているのではないか。そうなった背景の一つに、あるいは海のかなたから襲ってきたグローバリゼーションの大波にのみこまれてしまったということがあるのかもしれない。いずれにしろかつては壮大な「知」の羅針盤としてわれわれの頭上に輝いていたマルクスやウェーバーの名を口にするものはほとんどいなくなってしまう。

はてさて、どうしたらよいのか。私なども国際会議なるものに出かけることがたまにある。異文化・異宗教の者同士が同じテーブルについて議論をはじめ。自己主張をぶつけ合う長い時間が流れ、最後に互いに見解が異なることを認め合っておひらきになる。その最後の唯一の合意事項にたどりつこうと四苦八苦している中でいつも気づかされるのが、その国際会議の土俵には一本の黄金の尺度しかおかれていないということだった。西欧社会の方からもち出されてきた普遍主義という名の黄金の尺度である。

もうそろそろ、われわれの側からももう一つの黄金の尺度があると声をあげてもいいのではないだろうか。「土俵は一つでも、尺度は二つ」という主張である。アングロサクソンのいう普遍的価値にたいしてアジアの側からさし出すもう一つの普遍的な価値尺度といってもいい。そしてそのような「二つの尺度」の議論を展開していく上で、さきにあげた渋沢、出光、松下の三人に体现された「八百万教」の観点、すなわち多神教的な神々の「見えざる手」の感触が必要となってくるのではないだろうか。そのようなことについて、今日の経済学が何を考えているのか、あるいは考えていないのか、ぜひとも聞いてみたいものである。